

三山美緒子 (名古屋商科大学)

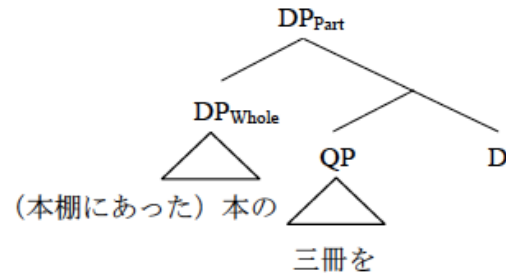
1. はじめに

➤ 本発表の目的: 部分構造 (partitives) については、意味解釈に関する先行研究はあるものの (Barker (1998)、Hoop (1997)、Ionin et al. (2006)等)、統語構造に関する先行研究は多くない。可能な語順に特に注目して現象を精査し、限定詞句 (Determiner Phrase; 以下 DP) の統語構造という研究の文脈の中で部分構造の構造を考察する。

➤ 本発表の主張: (1)の例文で「部分」と「全体」の意味役割を持つ二つの要素は、(2)のようにそれぞれ DP を投射する。また、全体要素の DP は部分要素の DP の指定部に位置する。

(1) 太郎は_[Whole (本棚にあった) 本]の (うちの) _[Part 三冊]を読んだ。

(2) 太郎は_{[DP [DP (本棚にあった) 本の (うちの)] [QP 三冊を]]}読んだ。



2. 先行研究の検討

2.1. 日本語の DP の内部構造に関する先行研究: Watanabe (2006)

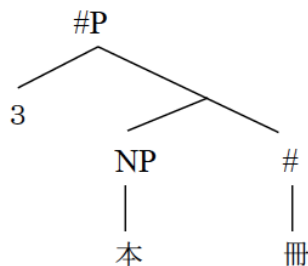
➤ (3)のような数量詞遊離の例について、共通の基底構造(4a)から DP 内部での複数回の移動を仮定することで可能な語順が説明できると主張した。

(3) a. 太郎は本三冊を買った。 (NP + Quantifier + Case)

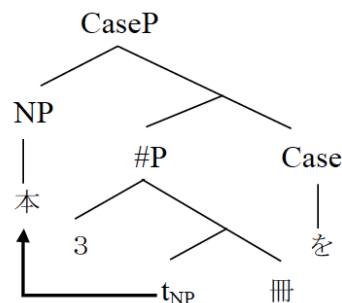
b. 太郎は本を三冊買った。 (NP + Case + Quantifier)

c. 太郎は三冊の本を買った。 (Quantifier + NP + Case)

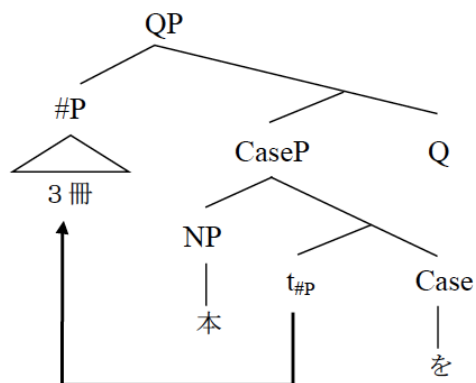
(4) a. 基底構造



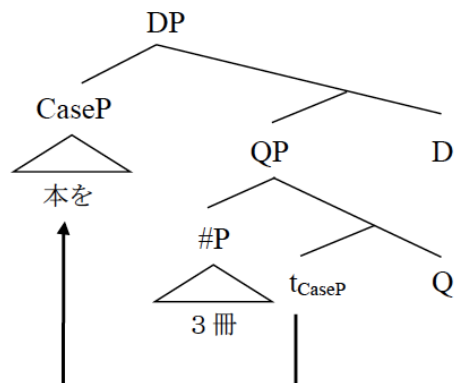
b. CaseP 指定部への NP の義務的移動
(Case 主要部の要求による)



c. QP 指定部への#P の随意的移動
(数の一致のため)



d. DP 指定部への CaseP の随意的移動
(特定性(specificity)の決定のため)



2.2. 日本語の部分構造に関する先行研究：[Sauerland & Yatsushiro \(2017\)](#) (以下 S&Y)

➤ Jackendoff (1977)の英語の部分構造に関する分析(5)に基づき、部分構造の部分と全体の要素それぞれが名詞を含む構造(7)が(1)の基底にあり、英語においても日本語においても、部分名詞を削除した部分構造と全体名詞を削除した部分構造があると主張した。すなわち、(5)のように部分名詞を削除した構造を(6a)が持ち、(5b)のように全体名詞を削除した構造を(6b)が持つ。部分と全体の意味は格助詞「の」が担う。

(5) a. two ~~books~~/~~things~~ of the books

b. two books of all those ~~books~~/~~things~~ Gina has

(S&Y (2017: 2))

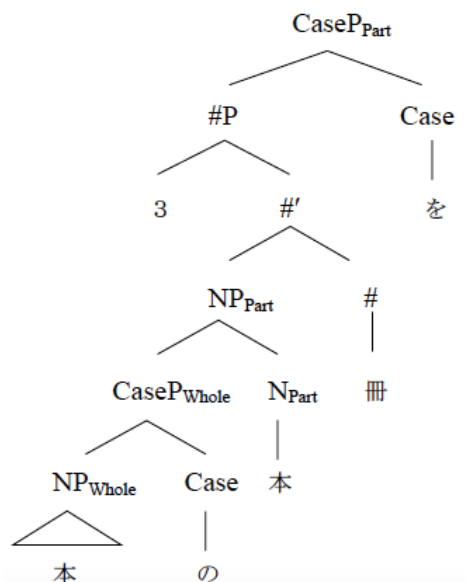
(6) a. 本の三冊を (= (1))

b. 三冊の本を

(cf. S&Y (2017: 4))

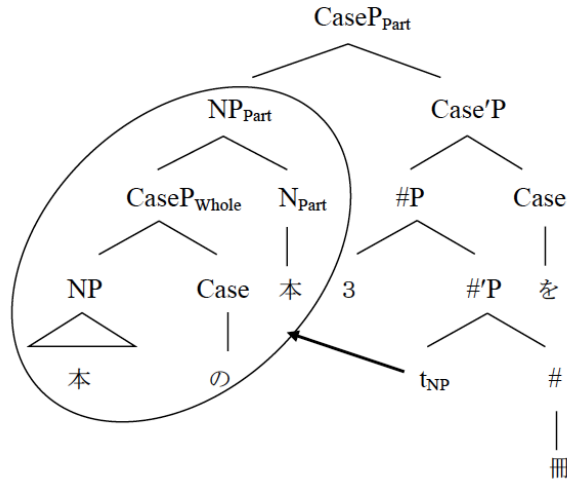
(7) [CaseP [#P 三 [NP [CaseP [NP 本] の] 本] 冊] を]

(cf. S&Y (2017: 17))



➤ 基底構造(7)から(1)が派生される過程としては、(8a)のように部分名詞とその補部である全体名詞を部分要素の CaseP 指定部に移動し (この移動は(4b)と同じものである)、その後部分名詞を削除する(8b)ことで得られる。

(8) a. [_{CaseP} [_{NP} [_{CaseP} [_{NP} 本] の] 本] [_{CaseP} [_{#P} 三 t_{NP} 冊] を]]



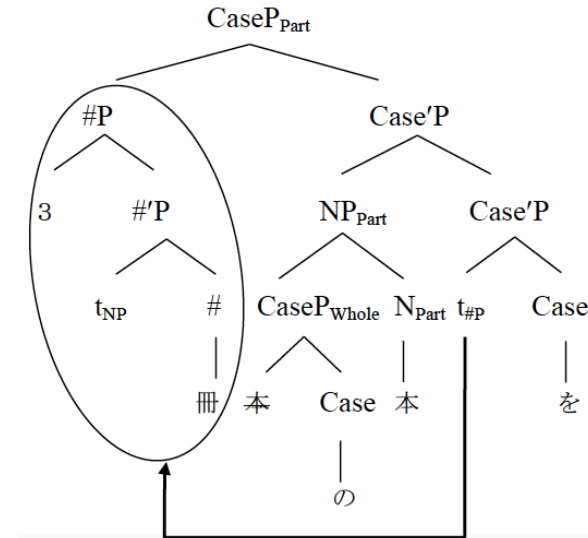
b. [_{CaseP} [_{NP} [_{CaseP} [_{NP} 本] の] ~~本~~] [_{CaseP} [_{#P} 三 t_{NP} 冊] を]] (部分名詞の削除)

➤ また、(9)に含まれる「の」が(1)に含まれる「の」と同じものであり、(9)も(7)を基底構造として持つと提案している。(8a)の構造ができた時点で全体名詞を削除した結果(10a)、格助詞「の」が付属できる要素がなくなったために、(10b)のように#PをCaseP指定部に移動することで「の」の付属先とする(この移動は(4c)と同じものである)。(9)では削除された全体名詞の位置に話者が「もの」など不特定の意味を持つ名詞を復元し、部分と全体の関係が空になってしまうために部分構造の解釈がないと主張している。

(9) 太郎は三冊の本を読んだ。

(10) a. [_{CaseP} [_{NP} [_{CaseP} [_{NP} 本] の] 本] [_{CaseP} [_{#P} 三 t_{NP} 冊] を]] (全体名詞の削除)

b. [_{CaseP} [_{#P} 三 t_{NP} 冊] [_{CaseP} [_{NP} [_{CaseP} [_{NP} 本] の] 本] [_{CaseP} t_{#P} を]]]



⇒ 英語の例文(5)と日本語の例文(1)および(9)を同じように扱うことができるようになる。

➤ S&Y の分析の問題点

① (9)は部分構造の性質をほとんど示さない。

→ S&Y によれば「の」は(9)でも部分と全体の意味関係を表すので、(1)と同じように「のうちの」のような要素で置き換え可能だと予測されるが、これは不可能である(11)。

(11)* 太郎は三冊のうち (の) 本を読んだ。

→ (10)の派生では「三冊」と「の」の間に削除された全体名詞があるとされているが、ここに名詞が存在する根拠が乏しい。(12)のように関係詞節を用いても、関係詞節は削除された全体名詞を修飾できない(cf. Ishizuka (2017))。

(12) ジョンは[Relative Clause メアリーが買った]三冊の本を読んだ。 (Cf. S&Y (2017: 18))

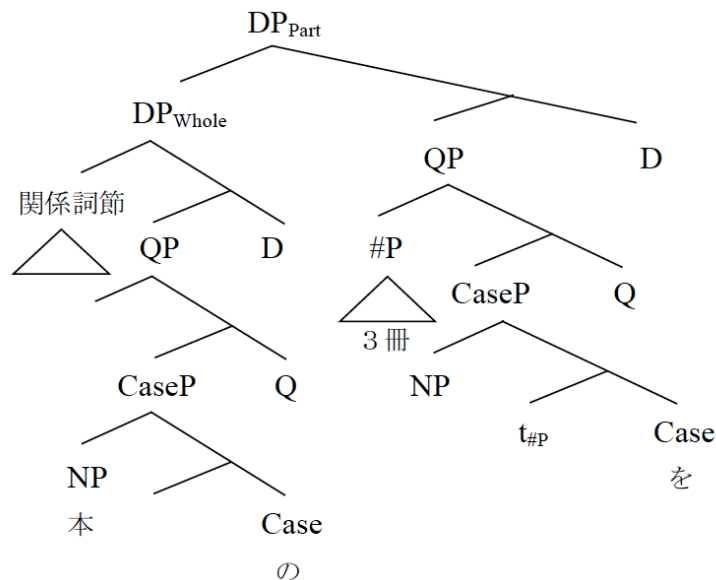
≠ ジョンはメアリーが買った本のうち三冊の本を読んだ。

② S&Y の主張する(1)の派生にも問題がある。(8b)では NP_{Part} の主要部である部分名詞が削除されているが、部分名詞が補部として NP_{Whole} を取る構造だと句全体の性質の復元が難しくなってしまう。(同様の問題は英語の分析(5)にも存在する。)

3. 提案

➤ 以上の議論を踏まえ、本発表では(1)の部分構造について、Watanabe (2006)の主張する限定詞句内の構造を採用した上で、(13)のように部分要素と全体要素がそれぞれ DP を投射し、全体要素の DP が部分要素の DP の指定部にある構造を提案する。

(13) 太郎は[DP[DP (本棚にあった) 本の][QP 三冊を]]読んだ。



➤ (13)の構造にもとづくと、以下の事実が説明できる。

① 部分要素と全体要素それぞれに数詞や名詞が現れることができる。

(14) 太郎は[DP[DP[CP 本棚にあった]][CaseP 本_{NP}[#P 五 t_{NP} 冊] の]] (うちの) [CaseP 本三冊を]]読んだ。

② 部分要素と全体要素の内部で様々な語順が可能である。

(15) 太郎は[_{DP}[_{DP}[_{CP} 本棚にあった] [_{QP} 五冊の] [_{CaseP} 本 t_{#P} の]]] (うちの) [_{QP} 三冊の本を]] 読んだ。

③ 部分要素が全体要素の前に出る語順が不可能である。

(16) * 太郎は[_{part} 三冊 (の本)] (の) [_{Whole} (本棚にあった) 五冊の本] を読んだ。

➤ Watanabe (2006)の主張する限定詞句内の構造と移動を採用すると、(15)の全体要素の DP 内で CaseP の移動が起こり(4d)と同じ移動である)、(17)が派生されることが予測されるが、(17)は非文である。この点については、句が複数の指定部を持っていないという仮定に立ち、全体要素を定性を持つ表現にするような関係詞節(Cf. Watanabe (2008)、井上 (1978))が DP 指定部に必要なために CaseP の DP 指定部への移動が阻まれると主張する。

(17)* 太郎は[_{DP}[_{DP}[_{CP} 本棚にあった] [_{CaseP} 本の] [_{QP} 五冊 t_{CaseP}]] [_{QP} 三冊の本を]] 読んだ。

➤ さらに、本発表の提案においては全体要素と部分要素がそれぞれ DP を形成するため、全体要素がなくても部分要素が独立した DP を形成しうることを予測するが、(9)や(18)の部分構造の解釈を持たない例はこの例であると主張する (部分構造の解釈を持つ例と表面上は同じになる例もある)。

(18) 太郎は本三冊を読んだ。 / 太郎は本を三冊読んだ。

4. まとめと展望

(19) 本発表の主張

- 部分構造においては、(i) 部分要素と全体要素がそれぞれ DP を投射しており、
(ii) 全体要素の DP が部分要素の DP の指定部にある。

➤ 本発表で主張した構造で、関連していると思われる構文(20)も説明できるだろうか。

(20)a. 太郎はコーヒーかお茶の (うちの) どっちかを飲んだ。

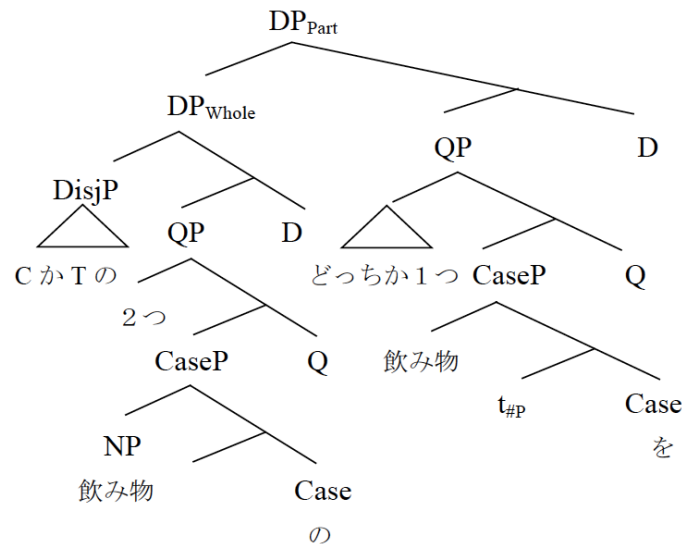
b. 太郎は二つの飲み物の (うちの) どっちかを飲んだ。

→ 部分要素と全体要素それぞれに数詞や名詞が現れることができる。

(21) 太郎は[_{Whole} コーヒーかお茶の 二つの飲み物の] [_{part} どっちか 一つの飲み物を] 飲んだ。

→ 「どっちか」が QP の指定部に基底生成される (または、数詞を修飾する要素として生成される) と仮定し、(21)についても(13)と同様の構造を持つと主張する。

(22) (21)の構造



➤ 課題

→ Watanabe (2008)で観察されている、部分構造の解釈が可能な例文はどのように説明できるか。特に(23b,c)において、構造の中に DP はいくつ含まれているのか。

- (23) a. 家族の (うちの) 三人をパーティーに招いた。 [名詞 + うちの + 数詞 + 格助詞]
 b. 家族三人をパーティーに招いた。 [名詞 + 数詞 + 格助詞]
 c. 家族を三人パーティーに招いた。 [名詞 + 格助詞 + 数詞]

→ 関連構文(21)において、容認度が下がる語順がある。これらはどのように説明できるか。

- (24) a. #太郎は_[Whole] コーヒーかお茶の飲み物二つの_[Part] どっちか一つの飲み物を]飲んだ。
 b. #太郎は_[Whole] コーヒーかお茶の (うちの) _[Part] 飲み物どっちか一つを]飲んだ。
 c. #太郎は_[Whole] コーヒーかお茶の (うちの) _[Part] 飲み物をどっちか一つ]飲んだ。

参考文献

Barker, Chris (1998) "Partitives, Double Genitives, and Anti-Uniqueness," *NLLT* 16, 679-171.
 Hoop, Helen de (1997) "A Semantic Analysis of the Partitive Constraint," *Lingua* 103, 151-174.
 井上和子(1978) 『日本語の文法規則』 大修館書店
 Ionin, Tania, Ora Matushansky, and Eddy G. Ruys (2006) "Part of Speech: Toward a Unified Semantics for Partitives," *Proceedings of NELS* 36, 357-370.
 Ishizuka, Tomoko (2017) "Does Japanese Have 'Reverse Partitives'?", Workshop on Altaic Formal Linguistics 13 での発表資料.
 Jackendoff, Ray (1977) *X-Bar Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
 Sauerland & Yatsushiro (2017) "Two Nouns in Partitives: Evidence from Japanese," *Glossa* 2(1): 13, 1-29.
 Watanabe, Akira (2006) "Functional Projections of Nominals in Japanese," *NLLT* 24, 241-306.
 Watanabe, Akira (2008) "The Structure of DP," *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa & Mamoru Saito, 513-540, OUP.